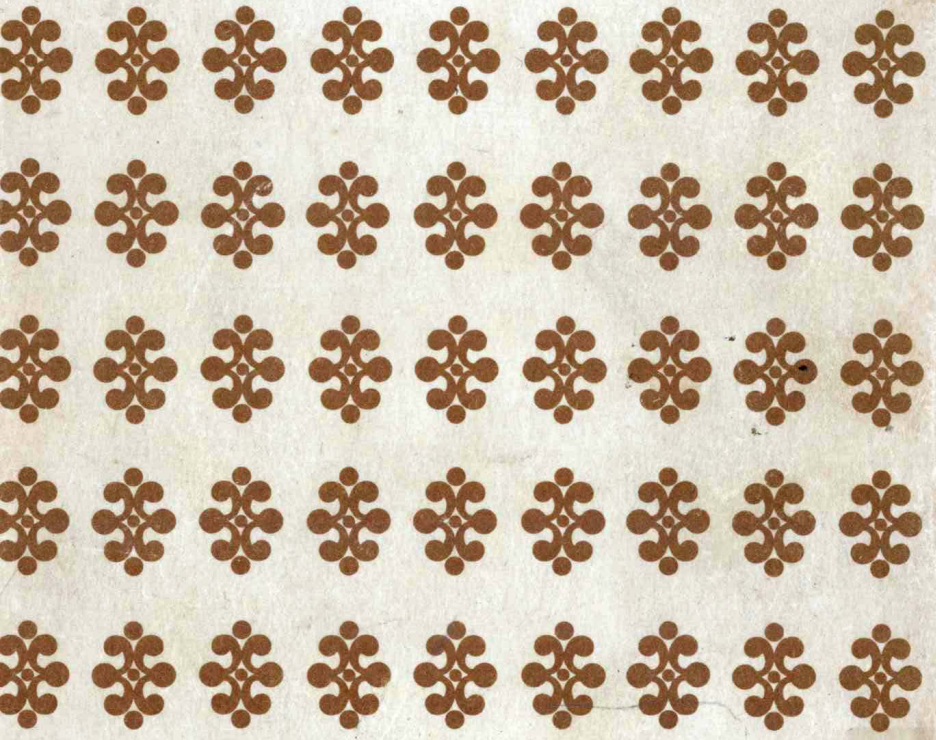





# 古代人と夢

西郷信綱



平凡社



西郷信綱(さいごう のぶつな) 1916年生。東京  
大学文学部卒業。専攻 古典学。著書『日本古代  
文学史』(岩波全書) 『国学の批判』(未来社) 『詩  
の発生』(未来社) 『万葉私記』(未来社) 『古事記  
の世界』(岩波新書) など。

---

## 古代人と夢

昭和47年 5月27日 初版第1刷発行

昭和47年 7月15日 初版第2刷発行

定 価 700 円

著 者 西郷信綱

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町4番地1  
郵便番号 102 振替 東京 29639  
電話東京 (03)-265-0451

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社石津製本所

---

© 西郷信綱 1972

0021-822130-7600

# 古代人と夢

西郷信綱



目  
次

第一章 夢を信じた人々……………7

第二章 夢 殿……………33

法隆寺の夢殿 35

聖所の眠り 40

夢と魂 50

六角堂の夢告 61

第三章 長谷寺の夢……………75

更級日記のこと 77

こもりくの泊瀬 86

長谷観音 97

夜と大地 106

第四章 黄泉の国と根の国……………121

黄泉比良坂 123

大穴牟遲の名義 130

夢と洞窟 134

夢と洞窟(つづき) 142

根の国とは何か 153

天と地 161

第五章 古代人の眼……………177

第六章 蜻蛉日記、更級日記、源氏物語のこと……………193

補論一 夢を買う話……………219

補論二 夢あわせ……………235

あとがき……………250

索引……………258





第一章 夢を信じた人々



夢にも固有な歴史があった。ある個人の夢が当人の生活史と切りはなせない関係にあるのを考えれば、これはあたり前な話である。そしてその歴史の層は、古代においてももっとも厚かったといえる。古事記から今昔物語まで、あるいはもっと降って中世の諸作品に至るまで、夢の記事は、それをふくまないのがむしろ例外と思えるくらい豊富である。それもたんに数が多いだけでなしに、夢を見たということが話全体の動機づけを決定している場合さえ少なしとしない。夢は、昔の文学にはなくてはならぬ大事な構成要素の一つであつたらしいのである。

ところがわれわれは、昔の人のこうした夢、ならびにそれに対するかれらの態度が何を意味しているかについて、まだ一度もまともに問うということをしていない。意識的ではないにしても、それを常識で自明と見なしているか、ばかばかしい迷信と考へているかのどちらかということになるが、とにかくこの方面の探究はまだほとんど試みられていない有様で、したがって古人の夢についてのわれわれの知見は、おそろしく貧弱である。これは従来の古代研究のやりかた、ひいてはその根本によこたわる人間の理解のしかたのどこかに、夢の世界に対し方法的にみずからを閉ざすような欠陥か故障があることを暗示する。

もっとも、さき立つ業績がまるでないわけではなく、私の知るかぎりそれは二つある。まず石橋

臥波『夢——歴史、文学、美術及び習俗の上に現はれたる夢の学術的研究』という本が明治四十年に出ており、芳賀矢一校閲で、井上哲次郎、高楠順次郎、富士川游といったお歴々が序を寄せている。学術的研究と銘うってはいるものの、実は「研究の前業」(富士川游)ともいうべき一種の資料集で、そして資料集としてなら今でも多少役立つ本である。次いで古川哲史『夢——日本人の精神史』(昭和四二年)という本がある。「参考書はなく、いわば孤立無援の状態で書かれた」と後記にあるとおり、これは日本人の夢にかんする最初の苦心の作であり、私もいろいろ教えられたとくに資料面での開拓がいちじらしい。ただ、古事記から志賀直哉に至る夢の記事を万遍なく拾いあげ、それに月並みな解説を加えていくという形で、果して精神史が成りたつのかどうか。精神史というからには、人間の精神と歴史とのかわりかた、つまり人間の世界連関において夢とは何かという問題が、もっと痛切に考察されねばならないのではあるまいか。こうしたことを感じさせる本ではある。

それはとにかく日本人の夢にかんする参考文献は、この二冊きりである。「孤立無援」ではないけれど、私も出発点につきもどされる。従来のもややかたは、古川氏の本もふくめ夢という現象にたいしてまだ充分に開かれているとはいえないように思う。

むろん近代になると、以前夢のもっていた衝撃力はうすれ、夢の価値やその必要性はめっきり下落する。人々はもう昔のように、夜寝て見る夢のなかに神や仏のお告げを讀みとったり、それで自分の運命を占ったりはしない。一部の神秘家を除けば、一般に夢の啓示的・予言的な機能に信をおくものは、ほとんどいなくなつたし、それはもう病理学にぞくするといつていい。これはこれとして当然のなりゆきであり、そこに新たな人間のエネルギーが解放されたことも事実である。また日常生活を営む分には、これで一向さしつかえない。しかしそうだからといって、夢をたんにはかない空ごとであり、荒唐無稽な逸脱であり、人間というものの理解にとつて意味をもたぬ残滓として遇するだけで事がすむかというに、それはまたおのずと別の問題になる。

ネルヴァルやイエーツのような作者がいたことを忘れぬ方がいい。あるいは手近かなところでは『夢十夜』の作者のことでもいい。いや、この枠はもっと拡げられる。ブルジョワ社会の親不孝者ないしは蕩児たるべく宿命づけられている芸術家や詩人たちは、むろん古代人と同じ風にはないけれど、ある意味では多少ともみな夢の信者であつたし、現にそうだと見れなくもないのである。しかし、そのことはしばらくおく。私がここに古代人の夢をとりあげるのは、近代人において犬して価値のないものとして、いわば脇の方に追いやられたままになっている諸要素の一つ——つまり

夢——をもう一度主題化することによって、人間的な何かを忘却のなから想い出すようにしてみたいというにすぎない。昔を想い出すことが忘れていた今を想い出すことであるような、そういう想い出しかたがありそうな気がする。

それにつけてもまず、夢と「うつつ」を従来のように単純に機械的に対立させるのではなく、夢もまた一つの「うつつ」、一つの独自の現実であると考へねばなるまい。平清盛がある霊夢のなかで嚴島明神から「うつつ」に長刀を賜ったという話からも想像がつくように、<sup>2</sup>少なくとも、古代人が夢を深く信じたのは、一つの現実——覚醒時の現実と同じでないにしても——としてやはり直接的に経験された確かさをそれが持っていたからである。何れ後で具体的にふれるが、夢はまさしく見るものなのであり、見るかぎりにおいて確実な現前であった。源氏物語によると、朱雀院は夢のなかで故桐壺院の亡霊に睨みつけられたのがもとで眼病にかかったとある（明石の巻）<sup>3</sup>。夢を信じるか信じないかは、時代の文化や精神の構造にかかわる。夢が一つの独自の「うつつ」であるいは、古人も今人も別に変らないのだが、ただ今人は古人のようには、信じるに足る霊夢を、あるいは同じことだが、信じないから霊夢をもう見なくなつたまでである。それでも夢は、なお一つの独自の「うつつ」、一つの現前でありつつけることを止めたわけではない。

かつて夢がどのように信じられ、どんな風に機能したかを知るため、具体例をまずここに一つ提示しておこう。それは今昔物語の「信濃国王藤観音出家語」（巻十九第十一話）という話で、宇治拾遺と梅沢本説話集にもほぼ同文のものを載せている。要約しようとかかったけれど、話の面白味が台なしになるし語気も伝わらなくなるので、左に結語を除き全文をかかけることにする（但し表記のしかたは多少改変した）。

今ハ昔、信濃国、□□ノ郡ニ□□ノ湯ト云フ所アリ。諸ノ人、葉湯ナリトテ来テ浴ル所ノ湯ナリ。

シカル間、ソノ里ニアル人、夢ニ見ルヤウ、「人來リテ告ゲテ云ハク、『明日ノ午時ニ觀音來リ給ヒテ此ノ湯ヲ浴ミ給フベシ、必ズ人結縁シ奉ルベシ』ト。コノ見ル人間ヒテ云ハク、『イカ様ナル姿シテ來給ハムトスルゾ』ト。告グル人答ヘテ云ハク、『年四十バカリナル男ノ鬢黒キガ、綾藺笠ヲ着テ、節黒ナル大胡録ヲ負ヒテ、革巻キタル弓ヲ持チ、紺ノ水旱ヲ着テ、夏毛

ノ行騰、白足袋ヲ履キテ、黒造ノ大刀ヲ帶キテ、葦毛ノ馬ニ乘リテ來ル人アラバ、ソレヲ必ズ  
 觀音ト知り奉ルベシ」ト告グルヲ聞ク」ト思フ程ニ、夢覺メヌ。驚キ怪ムデ、夜明ケテ後、普  
 クソノ里ノ人ニコノ事ヲ告ゲ廻ラシ、語リ聞カシム。

然レバ此ヲ聞キ次ギテ、コノ湯ニ人集マル事限ナシ。忽ニ湯ヲ替へ、廻ノ庭ヲ掃除シ、注連  
 ヲ引キ、香花ヲ備へテ、多クノ人居並ミテ待チ奉ルニ、日漸ク午時傾キテ未ニ成ル程ニ、カノ  
 夢ニ見ツル様ナル男來リタリ。顔ヨリ始メテ夢ニ云ヒツル様ニ露違フ事ナシ。諸ノ人ニ向ヒテ  
 「コハ何事ゾ」ト問へドモ、タダ礼拝ノミシテ、コノ事ヲ語ル人ナシ。一人ノ僧アリテ手ヲ摺  
 リテ額ニアテ礼ミ居タル所ニ寄リテ、男、「コハ何事ニ依リテ己ヲ見テ万ノ人ハ礼ミ給フゾ」  
 ト、横ナハレタル音ヲ以テ問フニ、僧答へテ云ハク、「コノ過ギヌル夜、人ノ夢ニ然々見ケル  
 ニ依リテ也」ト。

男コレヲ聞キテ云ハク、「己ハコノ一兩日ガ前ニ、狩ヲシテ馬ヨリ落ちテ、左ノ方ノ肱ヲ突  
 キ折リタレバ、ソヲ茹ムガ為ニ來リタルヲ、カク礼ミ合ヒ給フコソ怪シト思ユレ」ナド云ヒテ、  
 トカク行クヲ、万ノ人、後ニ立チテ礼ミノシル。男侘ビテ、「我が身ハ然レバ觀音ニコソ有  
 ルナレ。同ジクハ我法師ト成リナム」ト云ヒテ、ソノ庭ニ弓箭ヲ棄テ、兵杖ヲ投ゲテ、忽



ニ髻ヲ切りテ法師ト成リヌ。カク出家スルヲ見テ、万ノ人貴ビ悲シム事限ナシ。

シカル間、オノヅカラ此ノ男ノ知リタル人出デ来リテ見テ云ハク、「彼ハ上野ノ国ニ有ル王藤大主ニコソアルメレ」ト云ヒケレバ、万ノ人コレヲ聞キテ、名ヲ王藤観音トゾ付ケタリケル。出家シテ後、比叡ノ山ノ横川ニ登リテ、覚朝僧都ト云フ人ノ弟子ニ成リタリケルガ、五年バカリ横川ニアリテ、ソノ後ハ土佐ノ国ニソ行キニケル。ソノ後、ソノ有様ヲ伝ヘ聞キタル人ナシ。

しかしかの格好の男が明日この湯にやってくる、それが観音だ、というある里人の夢がたちまち村中にひろまり、狩で落馬した傷を癒しに湯治にやって来た男を、みんなして観音と信じこんでひたすら礼拝する。この圧倒的な力にとりかこまれ、その男の方も「我が身ハ然レバ観音ニコソ有ルナレ」といいその場で出家してしまふ。夢がすばやく己れを實現し、「横ナハレタル」坂東声の男がそれこそ夢のように観音に自化していくさまが面白くかたられている。この話につき、南方熊楠が例の調子で痛快な評言を下している。「星移り時更りて、観音と言われて自身を観音と確信する人こそ現代に無らめ、色男と呼ばれて、鏡と相談もしないで、自分を色男と有頂天に成て確信する者は、滔々皆是れだ。確信さるゝ物が時と共に變つたばかり、確信が古と今と其力を異にするのでは